

### 43. 関節リウマチ診療における KL-6 測定の意味—間質性肺炎検出能の検討—

内科学 (リウマチ・膠原病)

高村雄太

【背景と目的】KL-6 は、ILD の疾患活動性のマーカーとされているが、RA-ILD における臨床的意義は不明な点が多い。本研究は、RA 患者における KL-6 の ILD の検出力、ILD 新規発症 / 悪化の予測能、および KL-6 変化と ILD 発症 / 悪化との関連性を明らかにする。

【方法】後ろ向きコホート研究。対象は生物製剤使用前後に HR-CT 検査を受けた RA 患者。KL-6 は 400 U/ml 以上を上昇とした。ILD の診断は CT 所見を用いた。

【結果】129 人 (男 44 / 女 85)、平均年齢 51.6 歳、罹病期間 7.9 年、RF 陽性 84%。

86 例で KL-6 の測定が行われた。ILD は 48 人の患者で認められ (37%)、導入時の KL-6 値は、ILD 群で  $468 \pm 239$  U/ml、非 ILD 群で  $262 \pm 134$  U/ml だった。

KL-6 上昇は ILD 群で 23/48 (48%) に、非 ILD 群で 10/81 (11.3%) に認め、KL-6 の上昇は ILD の肺病変の中では GGO や Consolidation などの炎症性病変とは関連が小さく、網状影、蜂巢肺などの線維化病変と関連が大きかった。ILD を検出するための KL-6 の感度、特異度、陽性的中率および陰性的中率は胸部 X 線と同等で低かった。治療前の KL-6 は ILD の新規発症 / 悪化は予測できなかった。しかし、経過中の KL-6 上昇は ILD の発症 / 悪化と関連していた。

【結論】KL-6 は RA-ILD の活動性をモニターするための有用なマーカーではあるが、診断および予測能は乏しい。

### 44. 健康成人に対する日常生活上の様々な姿勢と脊椎アライメントの関係性の検討

埼玉医療センター 第一整形外科

速水宏樹, 飯田尚裕, 阿藤晃久, 東村 隆,

大関 覚

【目的】健康成人における日常生活上の姿勢が脊椎アライメントに及ぼす影響を検討すること。

【対象】健康成人のうち Exclusion criteria に該当するものを除いた 16 名を対象とした。Exclusion Criteria は 1) 3 ヶ月以上継続する腰痛 2) Xp 撮影時の腰痛 3) 単純 Xp 立位側面像で運動を制限する疾患 (強直性脊椎炎や高度変性など) 4) 外傷歴や手術歴 5) 女性 6) 各姿勢の維持が困難な者とした。

【方法】各姿勢に対して単純全脊椎側面像を撮影した。撮影した姿勢は 1) 立位 2) 正しい姿勢での坐位 (坐位) 3) ランバーサポート挿入下での坐位 (腰枕座位) 4) 下肢を組んだ状態での坐位 (足組) 5) リラックスした状態の坐位 (楽座) 6) 長坐位 7) 三角座り 8) 正座 9) 胡坐の 9 つの姿勢である。

【調査項目】各姿勢に対して Pelvic tilt, Lumbar lordosis, L5/S 角, L4/5 角, L1-4 角, Thoracolumbar kyphosis (TLK) を計測した。

【結果】立位と比較検討したところ、正坐はすべての調査項目で有意差を認めなかった。また腰枕座位は L4/5 角以外の項目で有意差を認めなかった。一方坐位は L1-4 角, TLK を除くすべての項目で有意差を持って、腰椎前弯は減少していた。楽坐位, 胡坐, 足組は TLK 以外の項目で、長坐位, 三角座りはすべての項目で立位と有意差があり、腰椎前弯の減少と骨盤後傾化を示した。

【考察・結語】立位と正坐のアライメントは類似していたが、正しい姿勢の坐位ですら立位と比較して腰椎前弯を減少させていた。リクライニングや和式生活における姿勢は概して腰椎前弯の減少と骨盤後傾化を起こす。側弯症手術における脊椎アライメントは立位の姿勢を目指して矯正されるため、腰椎前弯・骨盤後傾をもたらず姿勢は術後の姿勢として適切ではない。腰枕を入れることで、前弯形成を補助できると考えられた。